

卒業生を覚えて

2022年12月15日

# 学び、鍛え続ける姿勢を

小林 伸生 学部長

今年度末に卒業を迎える皆さんの多くが入学されたのは2019年春。まだ私たちが「新型コロナ」という言葉を知らない時代でした。そして、2年生(2020年度)の春学期から、長きにわたるリモート・ハイブリッド型の授業・演習という、予想もできない大学での学びの形となりました。

今年話題になった言葉の一つに、「青春って、とても密なので」という言葉がありました。私はゼミ活動でも、グループワーク・ディスカッションを多用していることもあり、そこでやり取りされている学生同士の熱心な共同作業を見るにつけ、「密」であることが生み出す付加価値、成長機会の貴重さを実感してきました。それだけに、コロナ禍でそうした活動に対する社会的な制約が、大学生活の現場まで下りてきたことは、皆さんにとっても大いに戸惑う経験であったと思いますし、教育を提供する我々にとっても、手探りの連続の日々でありました。

ただ、こうした社会を揺るがす大きな出来事は、これから皆さんが漕ぎ出す未来においても、おそらく待ち受けています。皆さんの多くは、これからおよそ50年の間、社会の第一線として、これまで培ってきた知

力・体力・思考力を資産として、社会に価値を還元する、いわば「人生の本番」を目前に控えています。そこには今回のコロナ禍と同様に、小ささまざまな波が押し寄せます。私は、社会に出て今年で32年になりますが、その間に、バブルの崩壊、阪神・淡路大震災、リーマン・ショック、東日本大震災、そしてコロナ禍など、社会を揺るがす大きな出来事がありました。そうした社会の動乱は、好む・好まざるによらず、私たちの生活や仕事に影響を及ぼし、それが時には大きな逆風になることもあります。

そうした社会の波に直面したときほど必要なのが、「自分がどのような社会とかかわりたいのか?」どのように社会に付加価値を提供し、それを通じて社会を少しでも良い方向へと導きたいのか?という、自分の内面における、ゆるぎない心構えなのだと思います。

「去年今年貫く棒のごときもの」という、高浜虚子の有名な俳句をご存じの方も多いと思います。この俳句の中の「棒」については、しばしば作者の意志・信念を表していると解釈されています。また、関学の体育会のモットーとして、今日まで共有されてゐる「Noble Stubbornness」

(高貴なる粘り、と訳される)も、いかなる逆境にあっても決して屈することなく、自らの最高のパフォーマンスを実現するために、最大限の努力をする姿勢を表す標語であると考ええます。

一回一回の努力が報われる／報われないは、その時々によって異なります。ただ、そうした個々の場面で直面する結果に一喜一憂することなく、継続的に社会に価値を還元するために、自ら学び・鍛え続ける姿勢は、5年、10年という単位では、必ず皆さんを、しかるべき責任ある立場へと導いてくれます。どうかそのためにも、個別の結果に一喜一憂せず、自らを律し、鍛え、その力を社会に還元する姿勢を持ち続けてください。そして、大学での4年間の学びよりもはるかに立派になった皆さんと再会できる日を楽しみにしています。